

母親の絆タイプと子の情動知能との関連性について

——EQ-i 日本語版作成の試み——

辻野 順子*, 雄山 真弓**

Correlation between Mother's Bonding Types and Emotional Intelligence of Child

——Approach to Japanese version of the EQ-i——

Junko Tsujino and Mayumi Oyama

要約：筆者らは、Bar-On, R. (1997) が開発した Bar-On Emotional Quotient Inventory (EQ-i) を日本語に翻訳し、EQ-i 日本語版を作成した。その EQ-i 日本語版を使用し、245 名 (男性 44 名 [18.0%]: 女性 201 名 [82.0%]) を対象に情動知能に関連する要因を探究した。

EQ-i は 17 のサブスケールがあり情動知能を多面的に測定できる。データの分析にはデータマイニング法を使用した。母親の絆タイプと子の情動知能との関連では、母親の絆タイプが **Optimal bonding** の場合は、EQ-i のサブスケールである「対人関係」の得点が高く、「消極的考え」の得点と「楽観主義」の得点が低いというアソシエーションルール (以下、ルールと表示) を導出した。一方、母親の絆タイプが **Affectionless control** の場合は、「対人関係」の得点と「順応性」、そして、「問題解決」の得点が低いというルールを導出した。また、不安高得点群は、「自尊心」の得点と「楽観主義」の得点、および、「現実性」の得点も低いというルールを導出した。不安低得点群は、「ストレス耐性」の得点と「主張性」の得点がともに高いというルールを導出した。勤務状況や学校生活と情動知能に関しては、適応状態の良い人は、「自尊心」の得点が高く、「幸福感」の得点も高いというルールを導出した。本研究の結果、子どもの情動知能は母親の絆タイプと関連すること、情動知能と不安が関連すること、そして、情動知能は勤務状況や学校生活への適応に関連することが実証された。

Abstract : We (the authors of this paper) compiled a Japanese version of the Emotional Quotient Inventory (EQ-i), developed by Bar-On, R. (1997). Based on the Japanese version of the EQ-i, we conducted a research on the attributes of emotional intelligence, involving a total of 245 persons (44 males : 18% / 201 females : 82%). The EQ-i includes 17 subscales that help measure emotional intelligence from a multidimensional perspective. Data Mining was applied to analysis of data. In terms of the correlation between mother's bonding types and emotional intelligence of the child, when the mother's bonding type was "Optimal Bonding," the subscale "Interpersonal Relationship" recorded high scores, while "Negative Impression" and "Optimism" recorded low scores, in which case, an Association

*関西女子短期大学 准教授

**関西学院大学 教授

Rule (hereinafter referred to as rule) was established. Meanwhile, when the mother's bonding type was "Affectionless Control", "Interpersonal Relationship" as well as "Flexibility" and "Problem Solving" recorded low scores, also deriving a rule. The group with High Anxiety points recorded low scores in "Self Regard", "Reality Testing", and "Optimism", again deriving a rule. The group with Low Anxiety points, meanwhile, recorded high scores in "Stress Tolerance", followed by "Assertiveness", also establishing a rule. As for the correlation between work or school life and emotional intelligence, those who have an adaptive nature recorded high scores in "Self Regard," as well as in "Happiness," suggesting that another rule can be derived. The results of this research illustrate that the emotional intelligence of a child is correlated to the mother's bonding types, that there is a correlation between emotional intelligence and anxiety, and emotional intelligence is correlated to one's adaptation to work environment or school life.

Key words: EQ-i 情動知能 Emotional Quotient 母親の絆 Mother's bonding 不安 Anxiety データマイニング data mining

I 目 的

本研究は、Bar-On Emotional Quotient Inventory (EQ-i: Bar-On, R., 1997)¹⁾を日本語に翻訳し、EQ-i 日本語版を作成した。そして、その妥当性を検討するために、外的基準との関連性を求めた。情動知能 (EQ-i 日本語版) に関連する要因はデータマイニング法により探究した。データマイニング法は、実際に得られたデータからアソシエーションルールを発見できるという特徴をもっている。

EQ-i は、もっとも包括的な自己評価式の情動知能の測定法だといわれる^{2,3)}。EQ-i には 133 項目あり、Interpersonal、Adaptation、そして、Good mood の 3 領域に分けられている。その 3 領域は 17 のサブスケールで構成されている。133 項目ある EQ-i は、多面的に深く個人の情動知能を知ることができる。EQ-i とサブスケールは文化圏を越えて優れた内的一貫性があり、再テストの信頼性も高い^{1,3)}。

EQ-i の開発は、個人間の差異に関する過去の研究を進展させ拡大させるものとして位置づけられている。例えば、EQ-i で測定した総合情動知能値は特性不安、抑うつ、境界例人格障害や情緒不安との間に強い相関を認めている

(Bar-On, R., 1997)³⁾。また、ビッグファイブ人格特性の各因子間の相関も強い³⁾。これらの相関の高さに関しては、EQ-i が提供する予測的な意義を EQ-i 日本語版においても明らかにする必要がある。

情動知能は、1995 年に Goleman, D. が "Emotional Intelligence" を出版して以来、注目されている。情動知能とは、感情を上手に生かす能力のことである。この能力は、個人が健康で自分らしく生活するために重要であるだけでなく、安定的で建設的な対人関係を築き、維持するためにも重要である。また、変化の激しい現代社会に適応し活力をもって貢献していくためにも、大きな役割をもっていると考えられている⁴⁾。

情動知能の研究は、知能指数 (Intelligence Quotient) の研究からスタートした。知能を考える場合、知的な能力だけに焦点をあてるのではなく、知能をより包括的に多面的にとらえることが必要ではないかという視点から、情動に関連した知能の側面について注目されるようになってきたのである。

情動知能には、相手の情動や行動を理解でき、それらをコントロールできるという応用的な能力としての社会的知能だけではなく、自分

自身の情動や行動を察知し、自分の行動をうまくコントロールできるという自己に対する能力も含まれている。従って、情動知能を高めることにより、心身の健康の維持と促進に役立ち、さらには個人および集団の健全さの保持を可能にする⁵⁾。

情動知能が関与する情動の交互作用は、誕生直後の二者関係から始まる。乳幼児にとっての二者関係の相手は養育者（主には母親）である。幼少期における母親と乳幼児が織り成す母子相互作用は母親によって調節されることが多い。母親が豊かな感性をもっているとき、わが子とも自然な情緒交流が可能となる。そして、母親の豊かな感性は、潜在的能力に加え、過去の体験や現在の状況に基づき母親自身が獲得したものである。豊かな感性をもつ母親は、わが子に対しても思慮深い態度で母子関係を築いていくと推測できる。

一方、乳幼児は母親との間で築き上げられたパターンに従って行動するようになる。母親が応答してくれると確信して育った子どもは、新奇な環境を探索する場合も支障がない。気分が乱されたときでも、すぐに母親のところへ行き、落ち着きを取り戻すことができる。これは、今までに母親と共にいるときの情動調節と経験に基づいている。母親と乳幼児の関係は、時間を超えての相互作用パターンの規則性である。二者の関係性を理解するためには、相互作用のパターンを超えた、その関係性の機能や目的について推論することも大切である。また、母親自身の人生早期における家族関係の質についての報告は、乳幼児への養育スタイルや乳幼児との関係性の特徴を予測するものである⁶⁾。人間関係における経験は、その後の社会関係を含む個人の行動に影響を及ぼすことになる。

このように人と人との情動的な関係性の問題は、人生の早期体験から始まり、個人にさまざまに影響を及ぼしていく。Paker, et al. (1979) は、parental bond を形成する際に親が貢献する要因を定義する重要性を指摘し、その方法とし

て、親の行動・態度を測定することを挙げている⁷⁾。Roe, A. & Sieglman, M. (1963), Schaefer, E. S. (1965), そして、Raskin, A. et al. (1971) の因子分析的研究は、「受容対拒否」、「心理的自律対心理的統制」、「きついコントロール対弱いコントロール」といった因子を見いだしている⁸⁻¹⁰⁾。これらの研究を受けて、Paker, et al. は研究を重ねた結果、最終的に、「保護対無関心・拒否」を表わす“care”の因子と「過保護対自律の奨励」を表わす“over-protection”の因子が得られ、25 項目の Parental Bonding Instrument (PBI) を作成した。Paker は、この2次元をクロスさせ、親の bond を4タイプに分類できると考えた。それは、(1) Optimal bonding (2) Affectionate constraint (3) Affectionless control (4) Absent or weak bonding である。母親の子どもへの愛着と子どもの情緒面の発達を確認されていることから、母親の絆の4タイプは子どもの情動知能を発達させ、潜在的な情動知能を伸ばすために大きな役割を果たすと考えられる。

一方、Sullivan, H. S. (1976) は、個体発生的には不安とは、幼児にとっての重要人物（主に母親）から認められないということを気遣う時に生れてくると考えた¹¹⁾。従って、不安は母親からの承認を得る活動へと幼児を絶えず制限するように機能する。また、Sullivan による不安とは、重要人物、つまり幼児の重要な相互作用の相手によって起こる感情の乱れによって呼び覚まされたものである。この論は、母親の絆の重要性を示しており、不安は生得的に有している自然発生的な現象であるが、母親の絆タイプ（情動の相互関係）により軽減されうるといえる。

また、Bar-On は情動知能と自己実現の歴史的なルーツを辿り、情動知能と自己実現との関係について研究している⁵⁾。そして、情動知能がどのくらい自己実現を予測できるかについて論じた。自己実現の歴史的なルーツは、1930年代後半からの Maslow, A. H. の研究に遡るこ

とができ、Maslow がこの領域の先駆者だといえる¹¹⁻¹³⁾。Maslow は、人間が生物学的な満足や安全、社会的、個人的な必要や欲求を満たした後、達成することができる唯一のものが自己実現であると論じた。平均的な情動知能のある人は、人生において自分の可能性や能力を実現することができる⁴⁾。また、情動知能が効果的に働いている間は、最も良い状態で自己実現できる可能性が高いという。Bar-On は、情動知能が自己実現を予測できるとした。

人は、社会生活の営みの中で多くの人との関わりによって成長し、自己実現を可能にすると思われる。人に関わるには、自分の気持ちに気づくこと、そして、他者の気持ちに気づく必要がある。その気づきこそが、情動知能の役目であり働きであろう。

以上の観点により、次の 4 項目について実証する。

- 1) 母親の絆タイプと子の情動知能の関連性
- 2) 不安と情動知能の関連性
- 3) 勤務状況や学校生活との適応と情動知能の関連性
- 4) EQ-i のサブスケール「自己実現」に関係する要因について

II 方法

1. 調査時期

2007 年 10 月～12 月

2. 被調査者

大阪府下にある A 専門学校、並びに兵庫県内にある B 大学の学生 (16 歳～67 歳) である。

3. 調査用具

(1) Bar-On Emotional Quotient Inventory (Bar-On, R., 1997) 日本語版

EQ-i 日本語版は、2006 年に筆者が代表翻訳者となり EQ-i の著作権をもつ Multi-Health

Systems Inc. から翻訳権を得て作成した。EQ-i は 3 領域から構成され、17 のサブスケールからなる。全質問項目は 133 項目である。

(2) Parental Bonding Instrument (PBI: Paker, G. & Tupling, H. et al., 1979) 日本語版¹⁵⁾

質問項目は 25 項目あり保護と過保護を測定する。

(3) State-Trait Anxiety Inventory (STAI: Spielberger, C. D., 1966) 日本語版¹⁶⁾

質問項目は、状態不安、そして、特性不安ともに 20 項目ある。本研究は性格傾向としての特性不安 (Trait Anxiety) を使用した。

4. フェイスシート

性別、年齢、職業、勤務状況 (学生生活) について質問する。

5. 分析方法

データマイニング (date mining) 法を使用する。

データマイニングとは、大量データをパターン認識テクニックや統計的手法によって処理することにより、意味のある新たなパターンおよび傾向を発見するプロセスである。統計的な有意性の検定ではデータ分析に強い仮説を設けるが、データマイニングではこのような仮説にとらわれない。データマイニングでは、アソシエーションルールが発見できる。アソシエーションルールは、特定の結果と条件セット (たとえば、母親の絆タイプと複数の EQ-i サブスケール) を関連づける。アソシエーションルールのアルゴリズムは、任意の属性の間にアソシエーション成立させることができるという点で、より一般的なディジションツリーのアルゴリズムより優っている¹⁷⁾。

III 結果

1. 研究対象者

・10 代～60 代までの 245 名 (男性 44 名 [18.0%]; 女性 201 名 [82.0%])

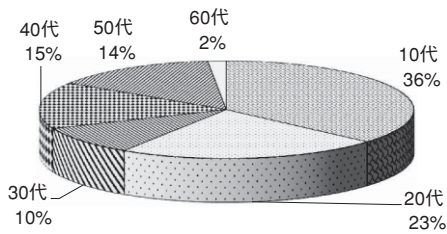


Fig. 1 調査対象者の年代別内訳

- ・ A 専門学校 116 名 (男性名 18 [15.5%]
女性 98 名 [84.5%])
- ・ B 大学 129 名 (男性名 26 [20.2%]
女性 103 名 [79.8%])
- ・ 年代別内訳
10代 92 名・20代 57 名・30代 24 名・
40代 39 名・50代 36 名・60代 4 名
- ・ 職業は、大学生、公務員、会社員、自営業、
主婦、無職等である。

2. 年齢

18 歳～67 歳 平均値 30.9 歳 標準偏差 14.3
中央値 22 歳

3. 勤務状況、或いは学校生活について

- ・ 項目別の該当者人数と割合
 1. まったくうまくいっていない (2 名：
0.82%)
 2. うまくいっていない (22 名：8.98%)
 3. ふつう (122 名：49.79%)
 4. うまくいっている (80 名：32.65%)
 5. 非常にうまくいっている (15 名：6.12
%)
記載なし (4 名：1.63%)

4. スケールとサブスケールの平均値・標準偏差・中央値・範囲

Table 1 にスケールとサブスケールの平均値・標準偏差・中央値・範囲を示した。EQ-i の 3 領域における 17 のサブスケールは Bar-On が分類している項目内容に準じた。各サブスケールの α 係数は、0.48～0.88 であった (Table

Table 1 PBI・不安・EQ-i 日本語版におけるスケールとサブスケールの平均値 (SD)・中央値・範囲

	平均値(SD)	中央値	範囲
PBI			
保護	26.8	29.0	36-1
過保護	13.5	12.0	36-1
不安	47.5	48.0	25-75
EQ-i			
総合得点	455.2(50.1)	453.0	334-580
1. Interpersonal			
①感情察知	25.4	26.0	36-11
②主張性	21.1	21.0	34-9
③自尊心	20.5	21.0	34-8
④自己実現	33.7	34.0	45-16
⑤自立性	22.2	22.0	34-10
⑥共感性	27.7	28.0	40-15
⑦対人関係	38.3	39.0	55-17
⑧社会的責任	33.3	33.0	45-20
2. Adaptation			
⑨問題解決	25.8	26.0	38-11
⑩現実性	33.7	34.0	46-20
⑪順応性	24.9	25.0	37-11
⑫ストレス耐性	26.7	27.0	40-12
⑬自制心	31.7	32.0	43-16
3. Goodmood			
⑭幸福感	33.4	33.0	45-17
⑮楽観主義	23.3	23.0	34-12
⑯積極的考え	17.4	17.0	30-8
⑰消極的考え	15.9	16.0	34-7

2)。

5. 母親の絆パターンと子の情動知能との関連性

保護得点 27 点 (平均値) 以上を高保護得点群、そして、保護得点の 26 点以下を低保護得点群とした。過保護も同様に 13 点 (平均値) 以上を高過保護得点群、そして、過保護得点の 12 点以下を低過保護得点群とした。これらの 4 区分を組み合わせると、(1) Optimal bonding (高保護得点群+低過保護得点群) 92 名、(2) Affectionate constraint (高保護得点群+高過保護得点群) 54 名、(3) Affectionless control (低保護得点群+高過保護得点群) 29 名、そして、

Table 2 PBI・不安・EQ-i 日本語版の α 係数

	α 係数
PBI	
保護	.92
過保護	.86
不安	.88
EQ-i	
1. Interpersonal	
①感情察知	.73
②主張性	.80
③自尊心	.88
④自己実現	.78
⑤自立性	.75
⑥共感性	.48
⑦対人関係	.82
⑧社会的責任	.50
2. Adaptation	
⑨問題解決	.74
⑩現実性	.59
⑪順応性	.68
⑫ストレス耐性	.77
⑬自制心	.76
3. Goodmood	
⑭幸福感	.75
⑮楽観主義	.61
⑯積極的考え	.65
⑰消極的考え	.70

(4) Absent or weak bonding (低保護得点群 + 低過保護得点群) 70 名となる。

母親の絆パターンと子どもの情動知能との関連性を知るため、データマイニング法によりアソシエーションルールを導出した。ルールは (1) Optimal bonding と (3) Affectionless control に導出された (Table 3)。Optimal bonding のルール①は、導出されたルール総数の 73.2% が Optimal bonding に該当する。該当ケースは 41 ケースであり、Optimal bonding の 44.6% の人がもつルールである。ルールの内容は、EQ-i のサブスケールの「対人関係」が平均以上であり、「消極的考え」が平均値以下、そして、「楽観主義」が平均値よりやや上から下方にあるという 3 つのサブスケールが関連する。

Optimal bonding のルール②は、導出されたルール総数の 67.8% が Optimal bonding に該当する。該当ケースは 40 ケースであり、Optimal bonding の 43.5% の人がもつルールである。ルール内容は、EQ-i のサブスケールである「対人関係」が平均値以上であり、「主張性」が平均値以上、そして、「自制心」もほぼ平均値以上という 3 つのサブスケールが関連する。

一方、Affectionless control のルール①は、導出されたルール総数の 78.3% が Affectionless

Table 3 母親の絆タイプと子の情動知能に関するアソシエーションルール
最小前提条件サポート 20%、最小ルール確信度 60%、最大前提条件数 3、ルール最大値 30 でルールを導出

(1) Optimal bonding (92 名)				
ルール	総数	確率 (%)	該当ケース	該当率 (%)
①対人関係 > 39 & 消極的な考え < 16 & 楽観主義 < 29	56	73.2	41	44.6
②対人関係 > 39 & 主張性 > 22 & 自制心 > 30	59	67.8	40	43.5
③対人関係 > 39 & 消極的な考え < 16	72	65.3	47	51.1
④幸福感 > 34 & 対人関係 > 39 & 楽観主義 < 29	74	64.9	48	52.2
(3) Affectionless control (29 名)				
ルール	総数	確率 (%)	該当ケース	該当率 (%)
①対人関係 < 36 & 順応性 < 24 & 問題解決 < 30	23	78.3	18	62.1
②対人関係 < 36 & 順応性 < 24 & 自己実現 < 35	25	76.0	19	65.5

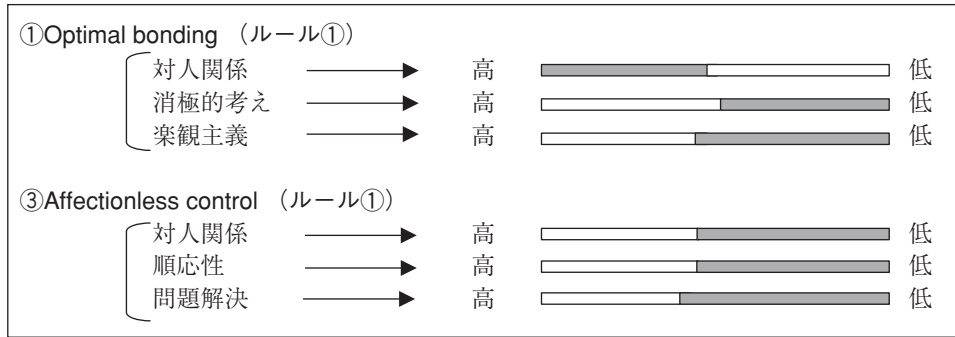


Fig. 2 母親の絆タイプと情動知能に関するアソシエーションルールのグラフ

control に該当する。該当ケースは 18 ケースであり、Affectionless control の 62.1% の人がもつルールである。ルール内容は、EQ-i のサブスケールである「対人関係」が平均値以下であり、「順応性」も平均値以下、そして、「問題解決」は平均値よりやや上から下方にあるという 3 つのサブスケールが関連する。

Affectionless control のルール②は、導出されたルール総数の 76.0% が Affectionless control に該当する。該当ケースは 19 ケースであり、Affectionless control の 65.5% の人がもつルールである。ルール内容は、EQ-i のサブスケールである「対人関係」が平均値以下であり、「順応性」も平均値以下、そして、「自己実現」はほぼ平均値以下であるという 3 つのサブスケールが関連する (Table 3, Fig. 2 参照)。

6. 不安と情動知能の関連性

不安得点の平均値 48 点以上を不安高得点群 (69 名) とし、47 点以下を不安低得点群 (70 名) とした。そして、両群の情動知能に関するアソシエーションルールを導出した。不安高得点群ルール①は、「自尊心」が平均値よりも低く、「楽観主義」が平均値よりも低く、「現実性」も平均値よりも低いという 3 つのサブスケールが関連する。このルールに該当者 47 名であり、そのすべてが不安高得点群に属する人である。不安高得点群の 47 名、67.1% が該当するルールである。不安高得点群ルール②は、

「自尊心」が平均値よりも低く、「幸福感」が平均値よりも低く、「現実性」も平均値よりも低いという 3 つのサブスケールが関連する。このルールに該当者 47 名であり、そのすべてが不安高得点群に属する人である。不安高得点群の 47 名、67.1% が該当する。

一方、不安低得点群ルール①は、「ストレス耐性」が平均値よりも高く、「主張性」も平均値よりも高いという 2 つのサブスケールが関連する。このルールの該当者は 50 名であり、そのすべての人が不安低得点群であり、不安低得点群の 72.5% の人がもつルールである。不安低得点群ルール②は、「楽観主義」が平均値よりも高く、「自尊心」も平均値よりも高いという 2 つのサブスケールが関連する。このルールの該当者は 48 名であり、そのすべての人が不安低得点群であり、不安低得点群の 69.6% の人がもつルールである (Table 4, Fig. 3 参照)。

7. 勤務状況 (学校生活) と情動知能との関連性

勤務状況 (学校生活) の自己評価である「まったくうまくいっていない」と「うまくいっていない」の 24 名を「うまくいっていない群」とした。そして、「ふつう」の 122 名を「普通群」、「うまくいっている」と「非常にうまくいっている」の 95 名を「うまくいっている群」としてルールを導出した。

うまくいっている群にアソシエーションルールを認めた (Table 5)。ルール①は、「自尊

Table 4 不安と情動知能に関するアソシエーションルール
 最小前提条件サポート 30%、最小ルール確信度 60%、最大前提条件数 3、ルール最大値 30 でルールを導出

不安高得点群 (69 名)				
ルール	総数	確率 (%)	該当ケース	該当率 (%)
①自尊心<22 & 楽観主義<25 & 現実性<35	47	100	47	67.1
②自尊心<22 & 幸福感<35 & 現実性<35	47	100	47	67.1
③自尊心<22 & ストレス耐性<27 & 現実性<35	46	100	46	65.7
④自尊心<22 & ストレス耐性<27	58	96.6	56	80.0
⑤自尊心<22 & 現実性<36	60	95.0	57	81.4
不安低得点群 (70 名)				
ルール	総数	確率 (%)	該当ケース	該当率 (%)
①ストレス耐性>28 & 主張性>22	50	100	50	72.5
②楽観主義>25 & 自尊心>24	48	100	48	69.6
③自尊心>23 & 主張性>22	46	100	46	66.7
④自立性>22 & 自尊心>22	57	98.3	56	81.2

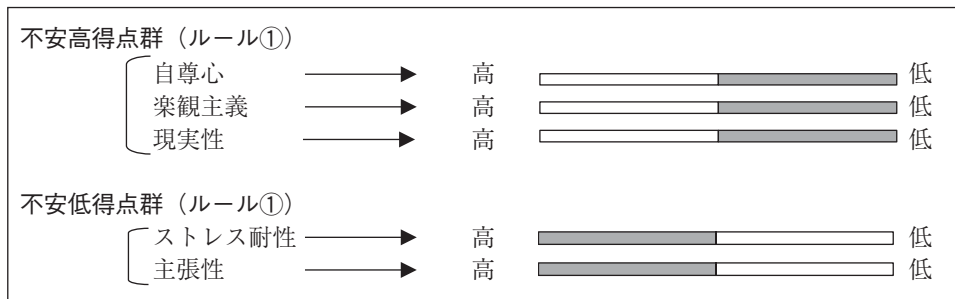


Fig. 3 不安高得点群と不安低得点群の情動知能に関するルールのグラフ

心」が平均値以上であり、「幸福感」も平均値以上という 2 つのサブスケールが関連する。51 名にみられるルールであり、うまくいっている群の 72.6% が該当する。該当者は 37 名で、38.5% の人が該当する。ルール②は、「自尊心」が平均値以上であり、「現実性」も平均値以上という 2 つのサブスケールが関連する。53 名のうち 69.8% がうまくいっている群に属し (37 名)、該当率は 38.5% である (Table 5, Fig. 4 参照)。

8. EQ-i のサブスケール「自己実現」に係る要因について

EQ-i のサブスケール「自己実現」に関連する要因を検証するため、母親の絆タイプによる分散分析を行い、多重比較は Bonferroni を用いた (Table 6)。加えて、不安、並びに EQ-i のサブスケールとの相関係数を求めた (Table 7)。

母親の絆タイプと「自己実現」得点の平均値と SD から、Optimal bonding と Absent or weak bonding 間に有意差を認めた。「自己実現」と不安の相関には負の相関 (-.431 (p<.01)) を

Table 5 勤務状況（学校生活）と情動知能に関するアソシエーションルール
最小前提条件サポート 20%、最小ルール確信度 60%、最大前提条件数 3、ルール最大値 30 でルールを導出

勤務状況（学校生活）がうまくいっている・非常にうまくいっている（95名）	ルール	総数	確率(%)	該当ケース	該当率(%)
	①自尊心>24 & 幸福感>35	51	72.6	37	38.5
	②自尊心>24 & 現実性>35	53	69.8	37	38.5

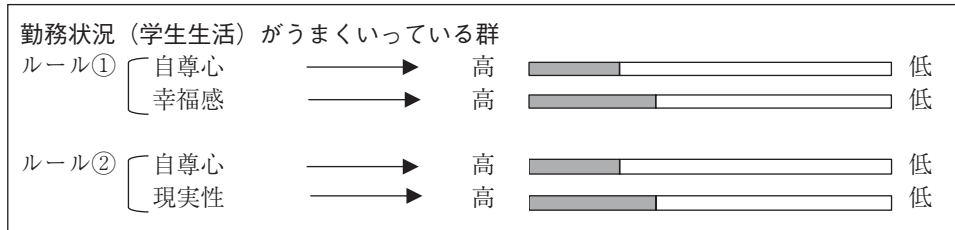


Fig. 4 勤務状況（学校生活）と情動知能に関するルールのグラフ

Table 6 母親の絆タイプによる自己実現の分散分析

母親の絆タイプ	自己実現の平均値(SD)
(1) Optimal bonding	35.1(5.2)
(2) Affectionate constraint	33.3(5.7)
(3) Affectionless control	34.1(5.5)
(4) Absent or weak bonding	33.7(5.5)

	平方和	自由度	F 値	有意確率	多重比較
グループ間	455.720	3	5.307	.001	(1)>(4)
グループ内	6927.179	242			
合計	7382.898	245			

認めた。また、EQ-i のサブスケールとの相関では、Interpersonal 領域の「感情察知」、「自尊心」、そして、「対人関係」に .5 ($p < .01$) 以上の正の相関が認められた。Adaptation 領域では、「順応性」に .506 ($p < .01$) の相関を認めた。また、Good mood 領域の幸福感には .642 ($p < .01$) の相関を認めた。

★以下はサブスケール「自己実現」の質問項目である。（*は逆点項目）

1. 私はできる限り自分の人生を有意義にしようとする。
2. 私は自分の得意なことが何なのか本当

Table 7 サブスケール「自己実現」に関する相関係数

	相関係数
不安	-.431**
EQ-i	
1. Interpersonal	
①感情察知	.532**
②主張性	.486**
③自尊心	.567**
④自己実現	/
⑤自立性	.385**
⑥共感性	.349**
⑦対人関係	.578**
⑧社会的責任	.276**
2. Adaptation	
⑨問題解決	.478**
⑩現実性	.327**
⑪順応性	.506**
⑫ストレス耐性	.445**
⑬自制心	.110 n.s.
3. Goodmood	
⑭幸福感	.642**
⑮楽観主義	.451**
⑯積極的考え	.061 n.s.
⑰消極的考え	.255**

**相関係数は 1% 水準で有意
n.s. non significance

にわからない。*

3. 過去数年において、私はほとんど何も成し遂げていない。*
4. 私は自分のすることに楽しみを見いだせない。*
5. 私は自分の興味を引くものがない。*
6. 私は楽しいことを続け、そして展開させようとする。
7. 私は面白いと思うことを楽しむ。
8. 私は自分が楽しんでいることから、できるだけ多くのことを得ようとする。
9. 私は自分の人生で何がしたいのかよくわからない。*

Ⅳ 考 察

本研究は、データマイニング法で分析を行い、母親の絆タイプと子どもの情動知能との関連性、不安と情動知能との関連性、そして、勤務状況や学校生活と情動知能に関するルールを発見した。ルールからは、情動知能の多様な要因を複合的に知ることができた。

この情動知能と母親の絆タイプの関連では、Optimal bonding と Affectionless control に特徴あるルールを導出した。Optimal bonding に属する人のルール①からは、対人関係が豊かであり、消極的な考えはもたず、そして、適切な楽観主義の人たちであるといえる。ルール②からは、対人関係が豊かで主張性もあり、自制心が高い人たちであると推測できる。Optimal bonding は、子ども時代に適切な絆作りを母親との間で発達させ構築させてきた人たちである。その人たちの対人関係の豊かさは、やはり母子間の絆作りに関係し、情動知能をフルに活動させ自分に自信をもって前向きに生活している人たちである。

一方、母親との絆が Affectionless control に属する人のルール①からは、対人関係を適切にもてず、順応性が低く、問題解決が難しいと推測できる。ルール②からは、対人関係を適切にもてず、順応性が低く、自己現実が困難である

といえる。Affectionless control は、子どもは母親の支配は受けたが、適切な対人関係の情緒的基礎が育ち難かったと考えられる。そのため、環境や境遇に従ってこれに適応することができず、問題解決を困難にする。また、ルール②にみられるように自己実現にも関与する絆のタイプである。

そして、不安の高得点群と低得点群からも特徴あるルールが導出された。不安高得点群のルール①からは、自尊心が低く、楽観主義ではなく現実性が乏しいことが示唆された。ルール②は、自尊心が低く、幸福感も低く、そして、現実性が低いという結果である。不安低得点群のルール①からは、ストレス耐性が高く、主張性も高かった。ルール②は、楽観主義であり、自尊心が高いという結果を得た。

不安は、Sullivan が論じたように、幼児にとつての重要人物（主に母親）から認められないということを感じた時に生れてくる現象である。不安の高得点群のルールに導出されたように、個人が存在するために必要とする自尊心が関係する状況である。その自尊心の低さが現実感に影響すると考える。

また、勤務状態や学校生活と情動知能に関するルールでは、うまくいっていると非常にうまくいっている群にルールを導出した。ルール①は自尊心と幸福感が高かった。ルール②は自尊心と現実性が高かった。勤務状態や学校生活という集団行動の中では、自意識の問題が重要である。自分自身を尊重する意識や幸福感が勤務状態や学校生活をうまくいっていると思わせるといえる。そして結果的に、うまくいっているので、自尊心や幸福感が高くなると考えることもできる。

最後に、自己実現に係る要因を実証した。母親の絆タイプとの関連では、Optimal bonding と Absent or weak bonding 間に有意差を認め、母親との適切な絆が自己実現を支えるといえる。不安とは負の相関がみられ、自己実現には自己の安定が求められるといえる。EQ-i サブ

スケール間の相関係数からは一元的な関連しかみることができない。しかし、自己実現が主に Interpersonal の領域のサブスケールに関連したことから、自己実現は、自己意識の充実と内的欲求が関係すると推測する。Maslow が論じたように、人は自己実現を達成することで、自己の精神的極地に至る。そのためには、情動知能を豊かに育み人間性を深化させる必要がある。

情動知能は柔軟性を有しており、かつ相互関連的な情動知能は単一の要因が関係するのではなく、多数の要因が関連し合いながら個人の情動知能を高めていくと考えられる。そして、その要因は、生後直後から影響をうける周囲の状況との相互作用だけではなく、生得的にもつ個人の気質も相互作用に影響するといえる。

本研究においては、EQ-i の各サブスケールの α 係数が、0.48~0.88 であった。十分な α 係数を得ていないサブスケールもみられ今後の課題となる。今回は EQ-i 原案に基づくサブスケールを使用した。因子分析を行い、日本独自のサブスケールの特定が必要であると考えられる。

また、EQ-i 日本語版の翻訳権取得にあたり、翻訳の基本ともいえるが原文に忠実な翻訳を要求された。従って、日本の文化を含有した翻訳ができず、詳細なニュアンスで表現できず、日本とアメリカの文化差を考慮できなかったように感じている。これらのことも、EQ-i 日本語版のサブスケールの信頼性に影響したと推測する。

以上のことなどを考え合わせ、さらに EQ-i 日本語版を洗練させていきたいと考えている。

V まとめ

情動知能は社会生活を営むため、そして、個人の心身を成長させ発達させるためには必要不可欠である。情動知能は、本人の生得的な気質とも関連すると考えられるが、誕生後の両親の情緒的な係わりなど生活体験に基づくことが大きいといえる。幼少期の生活体験の積み重ねが

個人の情動知能をより高めより深めていくと考えれば、子どもを取り巻く環境の重要性を痛感する。

子ども時代、そして、成人期の情動知能をより一層高め深めていくために、EQ-i 日本語版の標準化と情動知能に関連する要因の探究が急がれる。

引用文献

- 1) Bar-On, R. The Emotional Intelligence Inventory (EQ-i) : Technical manual. Toronto, Canada, 1997 Multi-Health Systems, Inc.
- 2) Bar-On, R & Parker, D. A. J. The handbook of emotional intelligence. San Francisco, Jossey-Bass, 2000.
- 3) Dawda, D., & Hart, S. D. 2000 Assessing emotional intelligence : Reliability and validity of the Bar-On Emotional Quotient Inventory (EQ-i) in university student. Personality & Individual Differences, 28, 797-812.
- 4) Goleman, D. 1995 Emotional intelligence. New York, Bantam Books.
- 5) チャロキー J., フォーガス P. J., & メイヤー D. J. 中里浩明・島井哲志・大竹恵子・池見陽 (訳) 2005 エモーショナル・インテリジェンス 日常生活における情動知能の科学的研究・ナカニシヤ出版 Ciarrochi, J., Forgas, P. J., & Mayer, D. J., 2001 Emotional intelligence in everyday life : A scientific inquiry. Psychology Press Inc.
- 6) 数井みゆき・遠藤利彦 2007 アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房
- 7) Parker, G., Tupling, H., & Brown, L. B. 1979 A parental Bonding Instrument. British Journal of Medical Psychology, 52, 1-10.
- 8) Roe, A. & Sieglman, M. 1963 A parent-children questionnaire. Child Development, 3, 355-369.
- 9) Schaefer, E. S. 1965 A configurational analysis of children's reports of parent behavior. Journal of Consulting, 29, 552-557.
- 10) Raskin, A., Boothe, H. H., Reatig, N. A., Schultcrbrandt, J. G., & Odle, D. 1971 Factor analysis of normal and depressed patients' memories of parental behavior. Psychological Reports, 29, 871-879.
- 11) サリバン H. S. 中井久夫 (訳) 1986 現代精

- 神医学の概念 みすず書房 (Sullivan, H. S. 1976
Conception of Modern Psychiatry, W. W. Norton)
- 12) Maslow, A. H. 1954 Motivation and personality.
N Y Harper and Brothers.
- 13) Maslow, A. H. 1955 Deficiency motivation and
growth motivation. In Jones R. M. (Ed.), Nebraska
symposium on motivation. Lincoln, NE University
of Nebraska Press.
- 14) Maslow, A. H. 1950 Self-actualizing people. A
study of psychology health, personality. 1, 11-34.
- 15) 三輪田明美・手塚一朗 2002 行動チェック
リストによる被虐待児の評価：診療所保育室利
用児に実施した 2 つの評価尺度の結果から (齊
藤学編 児童虐待 126-140, 金剛出版)
- 16) 清水秀美・今栄邦治 1981 STAI 日本語版
(STAI; STATE-TRAIT ANXIETY IN-
VEVTORY) (心理測定尺度Ⅲ 心の健康をはか
る〈適応・臨床〉堀洋道監修 松井豊編 2001
サイエンス社)
- 17) マイケル・A. ベリー・ゴードン・リノフ SAS
インスティテュート ジャパン・江原淳・佐藤
栄作 (訳) 2002 データマイニング手法 海文
堂